

農業と科学

昭和48年6月1日(毎月1日発行) 第200号
昭和31年10月5日 第3種郵便物認可

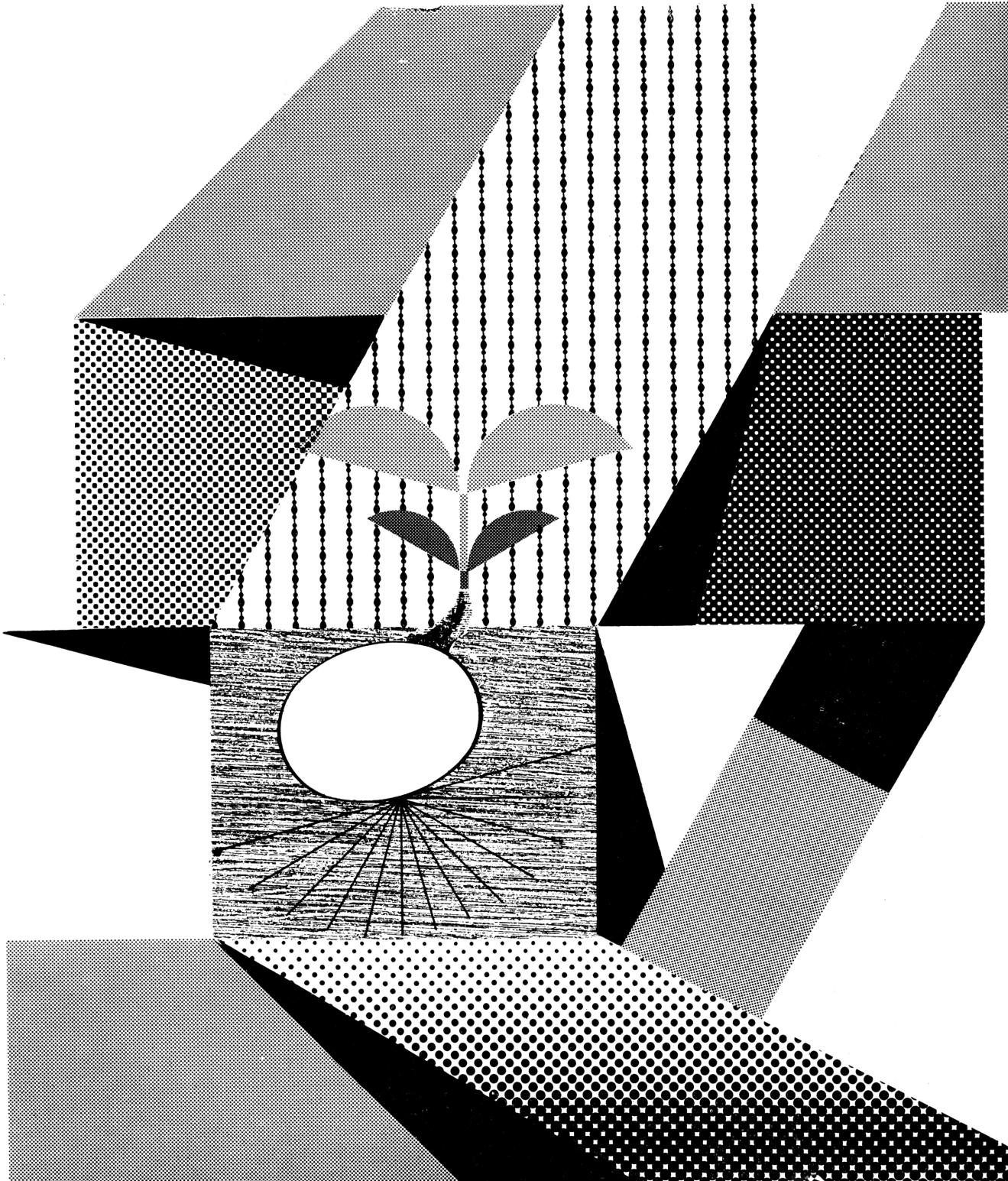
発行所 東京都中央区築地1-12-22 コンワビル
チッソ旭肥料株式会社

編集兼発行人: 伊藤和夫
定価: 1部10円

農業と科学

1973
6

CHISSO-ASAHI FERTILIZER CO., LTD.



〔6月のことば〕

花泥(はなどろ)が流れる季節

農林省農事試験場長

川井 一之

六月ともなれば、瀬戸内海の因島(広島県)あたるの島嶼部は、ときならぬ春雪のシトネを着た島島が、コバルト色の海上に浮ぶように、除虫菊の美しい花の季節の訪れとなる。おそらく、コンビナート企業がふりまく公害に、身も心もおかされている人々に、この美しい景観は一抹の爽やかさと安らぎとを与えていることだろう。

今日の合成化学万能時代にも、なお天然ピレトリンの良さを守るように、六、七百町歩ばかりの除虫菊が、耕して天に到る(我々は耕して貧困に到ると呼んでいた)段々畑に乱れ咲き、そこで昔から千歯こきで、花を収穫しているであろう農業者の姿が目に見え。

平均四、五反という零細な、急傾斜地の畑作経営にとっては、平坦地から山頂にいたるまで、これほど、あまねく現金収入の潤いをもたらした商品作物は、かつてなかったといってもよい。

今日のような環境時代には、天然ピレトリンとしての価値もさることながら、それ以上に、美しい景観の恩恵をあたえる環境保全的価値が、ふたたび見直される必要があるだろう。その地帯に棲む住民にとっても、また近くを旅する多くの人たちにとっても、この自然のもつ無限の価値は、きわめて貴重な資源であり、共有の財産であると思われる。なにか適切な環境行政としての措置が、とられることを望みたい。

ところで、この急傾斜地の畑作では、土を大切にす、つまり地力を大事に保全するところの、手鋤きという耕具による技術的慣行が、伝統として残されていた。

「花泥(はなどろ)が流れる」という古老のコトバに、土を愛する切実な感じがにじみ出ていることを、印象づけられたものであった。

花崗岩の風化した段々畑の土壌は、いわゆる受蝕性が大きくて、ちょっと大雨が降ると、エロージョン(土壌侵蝕)が起きて、いちじるしく大量の土壌が流出する。

とくに海藻(もば)のたばをトギリオークという棒で突き刺して、汗だくで山頂まで運び上げて、丹精して肥沃にした土壌が、梅雨や台風期には、山からガリー侵蝕でできた谷へ、そして河口から遙か沖合いに出て海の色を黄色くにごらすほど、大量の沃土が流されていく。土を愛する農業者の悲嘆には、はかり知れないものがある。

「花泥が流れる！」というこの島の古老のコトバのなかには、このような怨念の響きがこめられていたわけだ。かつて、急傾斜地の土壌侵蝕と土壌保全の調査研究で、これらの島々を八年間調査して歩き廻ったことがあった。

あの頃から十数年が経過した今日では、これらの急傾斜畑はどんどん放棄され、荒蕪地と化し、段々畑で働く農業者の姿がしだいに影を消して、こんどは土に代って人間が内海工業コンビナート地帯に、どんどん流出している時代になってきているのであろう。想えば、無量の感に胸がいたむさいきん、畑地といわず水田までも、堆厩肥が入らず、多肥料・多農薬の影響に加速されて、土が死んできているという声が、全国的に聞かれるようになってきた。これには、農業者の生産意欲を減退させた社会経済的な問題が、基本的に影響しているが、さいきん食糧の世界的窮迫見通しが強くなってきたことをあわせ考えると、技術的にも行政的事業としても、この農業の最も大事な基盤をなす土を守る運動を、なんとかして全国的に盛り上げる必要があることを痛感する。

かつて広島県の奥深い山村で、酪農ひとすじに生きてきた一人の農婦が、歌集がその年の農民文学賞を得たよろこびを託して、こんな歌を送ってきたことがあった。

うつむきて堆肥を負えば足もとの
蟻の歩みとわれの歩みと
何時果つるこの労働を思うとき

とじし眼より泪流るる

土に生きる婦人としての苦しみと怒りを、赤裸裸に訴えたものだが、私は一研究者として、この歌を受けとったとき、激しい衝撃をうけたことを想い出す。

農業技術研究者諸君。ぜひ新しい、人間解放的な土を守る技術を、すみやかに開発せられんことを！

富山県の白菜と肥料

富山県農業試験場砺波園芸分場

西川 久夫

はじめに

富山県は水稻単作地帯で、特に冬季は積雪量が多いために、施設園芸の発達が表日本にくらべ著しく遅れている。しかし、秋冬はくさい、冬キャベツ、秋冬だいこん、秋冬さといも、夏秋トマトなどの露地野菜の栽培がかなり多く、国の指定産



大型移植機による白菜の植付状況

地も小さいながら14産地もある。

このうち秋冬はくさいの産地が5カ所あり、本県の重要野菜の一つである。秋冬はくさいの総作付面積は、昭和47年度で約500haあるが、これらの指定産地で生産量の大半をしめている。

秋冬はくさいの指定産地は第1表のとおりで、昭和47年度は作付面積266ha、生産数量は9,206tである。

出荷先は主として関西市場（京都、大阪、神戸）および金沢、富山、高岡市場である。

特に本県の白菜は高冷地の長野ものが終り、暖地ものが出廻らない10月中旬から11月中旬に出荷され、関西市場に対する供給圏として大きな期待がよせられている。昨年从去年からペーパーポット育苗による機械移植が実用化され、本年は大型機（サークル式）、中型機（丸高式）が導入され、定植作業

の省力化がすゝめられる。

第1表 富山県の秋冬白菜の国の指定産地

指定野菜の種別	指定産地名	指定年度	区 域	作付面積 (昭和47年)	生産数量 (昭和47年)
秋 冬 は く さ い	八尾	昭41	八尾町	43	1,380
	黒部	41	黒部市	30	860
	南砺	43	福野町 福光町	59	2,140
	とやま	47	富山市	88	3,170
	高岡	47	高岡市	46	1,656
	小 計				266

栽培の概要

1) 品 種

現在、本県に栽培されている品種は、長岡交配耐病六十日白菜と、富山交配つるぎ白菜が全体の80%を占め、一部に長岡交配耐病五十五日、六十日、錦秋、横綱2号、栃木交配新栃光白菜などが栽培されている

2) 播 種 期

本県の白菜の播種適期は8月中旬で、従来はほとんど練り床育苗を行っていたが、はじめに述べたように昨年からは、ペーパーポット育苗による機械移植栽培が行われるようになってきた。

育苗方法はポットの規格TH-38を用いて箱育苗とし、12~16日育苗で本葉3~4枚、草たけ8~10cmのときに

目 次

- ※ 花泥(はなどろ)が流れる季節……………(2)
農林省農事試験場長 川井一之
- ※ 富山県の白菜と肥料……………(3)
富山県農業試験場砺波園芸分場 西川久夫
- ※ 沖縄の野菜について……………(5)
~その現状と問題点~
沖縄県農林水産部農産課 新城信吉
- ※ 果樹の新品種とその特性……………(7)
~ブドウ「高尾」について~
東京都農業試験場 芦川孝三郎
- ※ リンゴの新品種とその特性……………(9)
秋田県果樹試験場 鈴木宏
- ※ モモの新品種とその特性……………(11)
農林省果樹試験場 吉田雅夫
- ※ 鹿児島県大島郡沖永良部島
テッポウユリの球根栽培……………(13)
鹿児島県農業試験場 小林正芳
- ※ みかんの防除作業方式別栽培面積……………(15)
- ※ 生産は微増するが所得は落込む?……………(16)

植える。育苗方法と作業時間は第2表のとおり、練り床育苗の約半に労力が節減される。

なお、本年からV-4規格のポットが用いられる。

第2表 ペーパーポット育苗の作業時間

(富山農試・砺波・1972)

作業名	組人員	測定単位	作業時間	10a当り必要量	10a当り所要時間
育苗箱の組立	1人	1箱	20'	18箱	6.00"
ペーパーポット展開	2	1冊	35	18"	21.00
床土作り	1	1ha	49.40	6.6m	5.07
床土振るい	2	1"	1.00.30	165m ³	18.00
床土入れ	2	1箱	41	18	24.36
かん水	1	1"	09	18箱	2.42
は種	2	1"	1.17	18	46.12
覆土	2	1"	12	18	7.12
ビニール被覆	2	1ha	8.40	18	1.44
カンレイシャ被覆	2	1"	4.10	18	50
間引	1	1箱	2.43	18	48.54
合計					3.02.17

3) うね幅と株間

大型移植機の場合は、うね幅1.5mで株間45cmの2条植、中型移植機ではうね幅1.4mで株間50cmの2条植で、10a当り植付株数は3,000株を目標とする。

4) 肥料

従来は基肥に必ず堆肥や石灰窒素を施用していたが、最近の農業情勢からほとんど施用されなくなった。

北陸は表日本にくらべて、秋から冬にかけて降水量が特に多く、1,000mm以上で表日本の倍以上に達する。このことは、本県の秋白菜の施肥技術上の重要な課題である。

しかも本県は耕地面積の90%が水田で、畑地はきわめて少なく、従って白菜も水田裏作や水田転換畑が中心である。特に水田裏作の場合は肥料の流亡がはげしい。

福井県農業試験場のデータによれば、第3表にみられるように、畑土と水田土について調査した結果、施肥後20日後に、畑土のアンモニア態窒素

13.4mgに対し、水田土は2.7mgと水田土は著しく少ない。

このように水田を畑地化することによって、一時的に硝酸化成が進み、水田裏作では降雨によって基肥の流亡が多い原因となるわけである。

肥料流亡を少なくするには、ポリマルチの効果は大きいですが、本県のように高うね栽培で機械移植する場合は、まだ实际的でない。

一方、緩効性肥料や硝酸化成抑制剤入り肥料は流亡が少ないが、気温の低い年などは初期生育に多少の問題があり、今後の研究にまたねばならない。

白菜は定植後20日くらいまでに、肥料を速効的に効かせ、10月上旬の花芽分化期までに株張りをよくし、葉数を多くとることが栽培のキメ手になる。

また白菜はホウソク欠乏、石灰欠乏、苦土欠乏などが発生しやすいので、これらの成分のはいった肥料を施す必要がある。

以上のことから、基肥にマグポロンを120kgくらい施し、化成肥料は速効性の(磷酸安加里E802号など)を用い、生育期間に肥切れしないよう追肥する。

追肥は時期が大切で、第1回は定植後10日間くらいして施し、第2回は結球始め時(定植後35日目頃)に施用する。

第3表 水田土壌と畑土壌の硝酸化成の相違 (福井農試・1969)

土壌の種類	施肥時(mg/乾土100g)			施肥10日後			施肥20日後		
	アンモニア	硝酸	計	アンモニア	硝酸	計	アンモニア	硝酸	計
畑土	19.7	15.1	34.8	19.1	13.6	32.7	13.4	23.4	36.8
水田土	19.1	15.1	34.2	9.8	20.3	30.1	2.7	32.4	35.1

注：5,000分の1ポット 窒素a当り3.75kgを硫酸で施用

第4表 施肥例

肥料名	総量	基肥	追肥		3要素成分		
			1回	2回	N	P	K
マグポロン	kg 120	kg 120					
磷酸安加里E802号	140	140			22.4	14.0	19.6
追肥化成	90		40	50	16.2	4.5	13.5
計					38.6	18.5	33.1

沖縄の野菜について

～その現状と問題点～

沖縄県農林水産部農産課

新城 信吉

現 状

沖縄における野菜の需要は、近年著しい増大を続けているが、これに対応する供給については、生産規模が零細、かつ分散的であること、気象条件による豊凶の差が大きいこと、貯蔵性に乏しいこと、生産、出荷体制がととのっていないこと等、供給体制が十分に整備されてない実状にある。

このため、近年の野菜価格は激しい変動をくり返しつつ、きわめて高い上昇傾向をたどっており、消費者物価の上昇に多大な影響を与えている。

このように野菜価格の変動に対処して、安定的生産所得の確保と、消費地に対する供給の確保という面から主産地の育成、端境期における野菜生産について、ひきつづき栽培指導を行ってきた。

また野菜の生産は、都市近郊地域における工業用地化、宅地化の進展、そのうえさとうきび単作化の影響を受けて、その生産量は昭和38年度の63,920 tから昭和41年度には42,998 tと、年々減少の傾向にあったが、昭和42年度以降は持続的な価格上昇基調に支えられて、漸増の傾向を示し、昭和46年には収穫面積3,700ha、生産量72,900 tとなった。

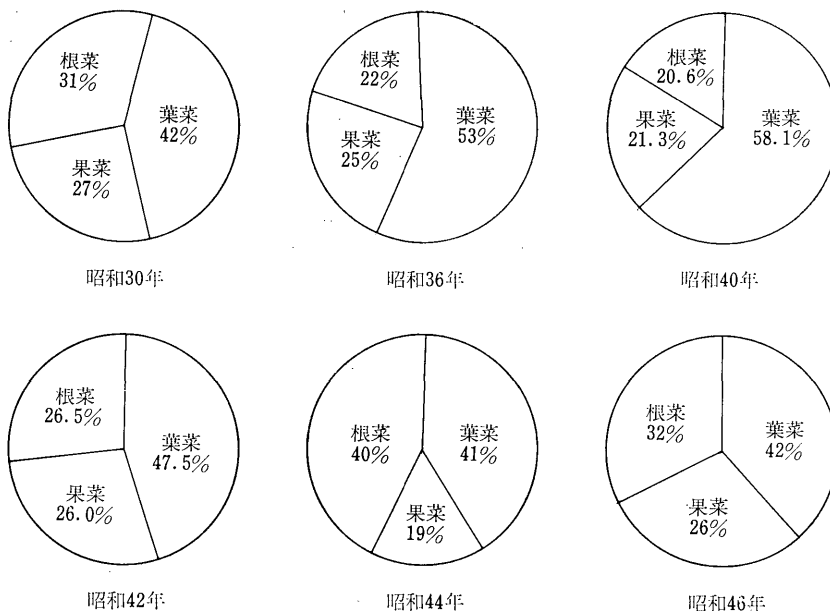
第1表 沖縄県における野菜の需給推移 (ha:t:千円)

項目 年次	島 産		輸 入		計	米 軍 販 売		輸 出		計	県 内 消費量
	面 積	生産量	数 量	金 額		数 量	金 額	数 量	金 額		
昭和42年	2,626	55,515	15,655	817,560	71,170 ^t	5,760	556,560	628	29,160	6,390 ^t	64,780 ^t
43	3,266	70,652	14,080	604,080	84,732	4,520	471,960	382	21,600	4,902	79,830
44	2,563	51,167	19,903	1,104,120	71,070	4,100	403,920	49	4,680	4,149	66,921
45	3,448	78,038	16,356	1,033,560	94,394	3,000	295,920	581	39,960	3,581	90,813
46	3,710	72,948	18,981	1,224,720	91,929	2,400	236,880	1,281	88,560	3,681	88,248

資料：琉球政府「農林水産統計」

注：ドル換算率 1ドル=330円

野菜の類別消費構成の推移



資料：農林水産部農産課

しかし、生産が需要に対応できず、消費者物価の上昇に大きな影響を与えるとともに、野菜の移入を増加させている。

作付面積についてみると、昭和38年度の3,744haから、昭和41年度には2,211haと、対前年比で40.9%の著しい減少となった。

しかし、昭和42年度以降は増加の一途をたどり、昭和44年度には3,116haとなっており、昭和41年度を40.9%も上回る増加を示した。

さらに野菜消費形態の変化に対応して、野菜生産は周年供給化の方向をたどり、主要な果菜類とくにトマト、きゅうり、ピーマン、スイカ、メロン等の施設園芸ものの比重が高まりつつある。

問 題 点

本県の野菜の経営規模は極めて零細で、それに加えて台風、病虫害等の自然災害が多く、かん排

水施設等の基盤整備等も十分なされておらず、生産、出荷組織についても市場流通機構が未整備のため、計画的な生産出荷が行われていない。

このため価格の変動が著しいので、今後は集出荷施設の導入等によって、共同集出荷組織の育成が必要である。

また野菜の本土出荷については、本県の亜熱帯の立地条件を利用して生産されたうり類、サヤインゲン等が有望であるが、本県には他府県に未発生ウリミバエが発生しているため、植物防疫法により移動の制限または禁止をされているので、これが早期撲滅をはかるため、徹底した防除を行っている。

また、国の補助によりコバルト60を利用した不妊雄放飼法による撲滅を年次計画で行うため、48年度に実験的に実施することになった。

第2表 年次別野菜の輸出推移

(kg:円) 農産課資料

年次	昭和43年		昭和44年		昭和45年		昭和46年	
	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額
キャベツ	970	52,200	1,650	93,240	84,644	2,650,320	2,902	190,800
玉ねぎ	24,427	2,097,000	20	1,800	108,132	11,665,080	38,106	5,025,600
セロリ	870	52,920	20	1,800	1,618	220,320	2,478	342,720
にんじん	130,750	5,456,880	—	—	306,209	17,954,640	275,731	14,051,520
玉ねぎ	198,000	11,500,200	—	—	61,143	4,759,920	904,739	60,775,560
ニンニク	26,500	2,303,280	14,000	1,212,120	13,032	1,189,440	13,357	2,801,160
パセリ	—	—	—	—	41	11,880	12	7,920
トマト	16	2,880	32,936	3,234,240	24	2,520	20,046	2,206,800
だいこん	—	—	—	—	227	35,280	2,734	345,240
サトイモ	—	—	—	—	1,364	534,240	774	358,920
ねぎ	—	—	—	—	136	29,160	706	130,680
しょうが	—	—	—	—	2,091	349,200	2,841	870,120
オクラ	—	—	—	—	1,961	729,720	6,709	999,360
とうがら	—	—	—	—	—	—	6,000	477,720
メロン	—	—	—	—	—	—	741	650,160
結球白菜	—	—	—	—	—	—	3,075	213,480
その他	—	—	8	2,160	15	2,880	1,304	158,040
計	381,533	21,465,360	48,634	4,545,360	580,637	40,134,600	1,282,255	89,605,800

第3表 野菜の収穫面積および生産量の推移

(ha:t) 農産課資料

年次	昭和43年		昭和44年		昭和45年		昭和46年	
	収穫面積	生産量	収穫面積	生産量	収穫面積	生産量	収穫面積	生産量
キャベツ	536	15,203	328	9,866	571	18,063	516	14,531
ほうれん草	107	1,857	97	1,560	108	1,870	118	1,864
ちし	103	2,185	55	779	208	3,614	169	2,697
結球白菜	276	4,928	232	4,227	283	6,265	232	4,358
計	1,022	24,173	712	16,432	1,170	29,812	1,035	23,450
だいこん	310	8,669	275	8,544	283	9,061	217	6,703
にんじん	192	5,142	137	4,060	236	7,174	274	6,531
ばれいしょ	151	3,282	211	3,818	223	5,428	168	3,408
計	653	17,093	623	16,422	742	21,663	659	16,642
きゅうり	207	3,736	130	2,432	139	2,587	194	3,790
かぼちゃ	135	2,151	102	1,416	136	1,532	117	1,402
とうがら	125	2,744	53	1,025	77	1,929	171	3,002
すいか	130	2,202	173	1,595	223	2,988	368	5,916
にがうり	201	3,126	107	1,362	161	2,536	207	2,358
トマト	59	1,139	41	687	53	1,931	105	1,894
さや豆	86	893	62	1,061	95	1,721	99	1,303
計	943	15,991	668	9,578	884	15,224	1,261	19,665
合計	2,618	57,257	2,003	42,432	2,796	66,699	2,955	59,757

果樹の新品種とその特性

～ブドウ「高尾」について～

東京都農業試験場

芦川 孝三郎

1. ま え が き

たねなしブドウは現在、消費者から非常に歓迎され、その消費も順調に伸びている。しかしその主体はデラウェアだけといってもよく、ジベレリンの2回処理によって、果粒の無核化と肥大をはかっているのが、本来のたねなしブドウの出現が待望されているが、まだ実現していない。

このたび当场で育成した新品種「高尾」も、ジベレリン処理を必要とするのであるが、その処理が1回ですみ、デラウェアに比し果粒や果房がはるかに大きく、特異な性状をもっているの、ここにご紹介する。

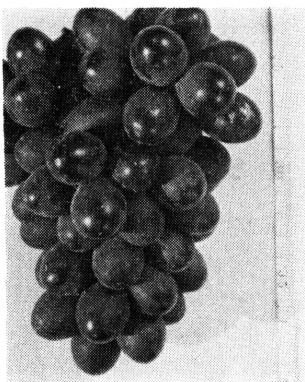
2. 育 成 経 過

ブドウに巨峰という品種があり、果粒が巨大で食味も優良なため、ひろく好評を博している。しかしこれは一面では、生産者泣かせの品種で、とくに花振いの防止には多大の苦心を要する。

そこでこの点を改良する目的で、1956年秋、巨峰の自然結実果から得た種子約120粒を播き、実生を育成してみた。その後6～7年たつと、続々と結実してきたが、花振いしない系統はついに得られなかった。そこで全系統に対し、ジベレリン処理を施してみたところ、無核化が容易で品質のすぐれた系統が現われた。これが「高尾」で、最初は「立川1号」と仮称していた。

当初は無核種のように見えたが、よく調べてみると、無処理ではやはり若干、有核粒を生じるこ

第1図「高尾」の果房



とがわかった。しかし開花末期の1回処理だけで、充分商品性のある果房が得られるので、本格的な無核種が出現するまでの間、つなぎの品種としての役割りは果せるのではないかと考えている

1967年度から、農林省主催の系統適応試験の中で、各地の試験場において検討されているが、まだ着果し始めた段階のところが多く、詳細については今後の検討にまたねばならない。

3. 特 性

(1) 樹性 全体として巨峰に似ている。樹勢は旺盛で枝は太く、伸長力も強い。葉裏のじゅう毛はほとんどみとめられない。

花芽の着生は巨峰よりやや少な目であるが、細かい結果母枝や副梢からも、比較的大きい果房を生じる。

巨峰に比し萌芽展葉はやや早いが開花は少しおそい。耐病性は巨峰と同程度のようで、とくに特定の病害に対し、抵抗性が弱いというようなことはみとめられない。

(2) 果実 本種は無処理では満足な果房は得られない。花振いがおこるし、また1果粒が4～5gにしかならない。ジベレリン処理した場合には別品種と見ちがえるほどの果粒、果房を生じる。

果皮は紫黒色を呈し、やや厚く丈夫で裂果のおそれは少ない。果粒は長味をおび1粒7～8gが標準であるが、大きいものは10g以上にも達する。果房は放任しておけば大きくなりすぎるので、整形して400～500g程度におさえる。

糖度は17～18度で酸味は少なく、肉質は硬く緊っていて独特の風味がある。果実の芳香は巨峰に似ている。果皮と果肉の分離はやや不良であるが、食べなれば別に問題はない。

日もちちは8月の高温時には5～6日であるが、9月に入ってやや冷涼な状態になれば7～10日は大丈夫である。果実の成熟期は東京で8月中、下旬である。

第2図「高尾」の結果状況



4. ジベレリン処理

デラウェアの場合と同じく、まず樹をよく充実させておくことが大切である。体内の栄養条件が不良の場合には、ジベレリン処理に細心の注意を払っても、花振いをおこすおそれがある。

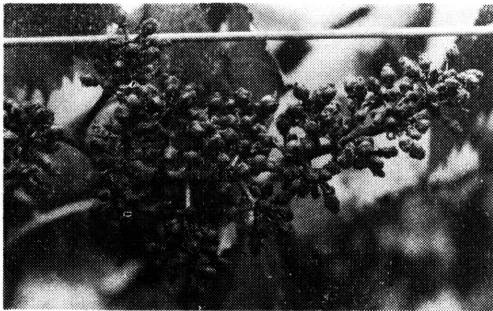
(1) 処理時期 開花末期から開花終了後4~5日目くらいまでが適期である。開花前に処理する必要はみとめられない。開花直後の処理だけで、完全に無核化できる。

(2) 処理前の新梢の摘心および花穂の整形 開花の3~7日前(東京で5月下旬~6月上旬)に新梢の先端を摘心する。

発育が旺盛のものはもちろん、中程度のものにも実施する方がよい。花穂に対しては、岐肩を含め、上部3~4段の小花穂と下端を若干摘除する。

(3) 処理適期の花穂の状態と処理濃度 処理時期があまり早すぎると、摘粒効果が出たり、また果房が屈曲しやすい。おそすぎると果粒を十分に肥大させることができない。その適期は、デラウェアのように、予測するのではなく、開花という明瞭な現象が指標なので、判定が容易である。

第3図 花穂の開花末期の状況 (ジベレリン処理適期)



第3図の時期が適当で、花穂の先端が開花を終る頃から4~5日目までの、約5~7日の期間が

第1表 ジベレリン処理時期が果房に及ぼす影響 (1972)

ジベレリン 処理時期	果房長	果房重	果房長 1cm当 り重量	1果房 粒数	1果 粒重	果汁 糖度	果梗重	果梗 段数
	cm	g	g	個	g	度	g	段
開花盛り	17.9	433.3	24.2	60.0	7.1	17.8	7.7	21.5
開花末期	17.1	550.6	32.2	74.8	7.2	17.5	9.8	22.5
開花後3日目	17.7	533.8	30.2	65.6	8.0	17.4	10.3	21.4
開花後7日目	15.8	380.5	24.1	54.3	6.9	16.8	7.4	21.2
無処理	19.5	243.0	12.5	71.0	3.4	17.3	4.0	26.0

(注) 1972年5月30日開花始め, 6月2~4日開花盛り, 6月5~7日開花終り, 8月25日収穫

適期である。処理時期別の試験結果については第1表のとおりである。

処理は浸漬でも噴霧でもさしつかえない。処理濃度は50 P P mでもかなりよい成績を示しているが、やはり100 P P mが最良である。(第2表, 第3表参照)

第2表 GA 処理濃度試験成績

(1202号台6年生樹 1971)

GA 処 理濃度	果 房 長		果房重	1粒重	糖 度
	処理時	収穫時			
	cm	cm	g	g	度
10ppm	15.3	17.3	301.8	6.6	16.8
25ppm	15.9	17.5	449.8	7.3	17.0
50ppm	15.5	18.0	486.7	7.4	17.0
100ppm	15.6	19.3	529.8	7.2	17.2
無処理	15.4	16.7	223.2	4.6	17.4

第3表 GA 処理濃度試験成績 (15年生原木 1971)

GA 処 理濃度	果 房 長		果房重	1粒重	糖 度
	処理時	収穫時			
	cm	cm	g	g	度
10ppm	13.6	15.5	365.4	6.1	17.5
25ppm	13.6	14.7	384.0	7.0	17.7
50ppm	13.7	16.3	442.8	7.3	18.0
100ppm	13.4	16.7	490.0	7.5	18.1
無処理	13.2	13.9	152.5	4.3	18.3

5. 「高尾」栽培上の問題点

(1) 凍害 本種は樹勢旺盛で徒長しやすいので、つとめて枝梢の充実をはかる必要がある。化学肥料としての窒素は原則として施用しない方がよい。りん酸, 加里, カルシウム等は十分に施用する。

果房の成らせすぎは絶対に禁物で、10 a 当り1,000~1,200kg程度におさえ、最良の条件の場合でも1,500kgをこえないようにする。これらの点に注意しないと、凍害をまねくおそれがある。

(2) 果梗の硬化 シベレリン処理によって果梗の硬化することはさけられないが、各種の条件によってかなり相異なる。処理時期が早い場合、処理濃度が高い場合、結果母枝の充実不良の場合等に、硬化の程度が強くなる。

しかし摘粒の程度に注意し、適度に果粒を密着させるようにすれば、果梗の硬化に伴う脱粒の問題はほとんど解決できる。

リンゴの新品種とその特性

秋田県果樹試験場

鈴木 宏

リンゴの品質については、栽培技術も大いにあるが、より以上に、おいしい品種ということがよくいわれる。新しい品種に対しては農家も血まなこになって探し求め、常に良い品種への更新をはかっている。最近話題の新しい品種について述べる。

1. 青リ2号

来 歴 青森県リンゴ試験場において、ゴールデン不明品種(祝ではないかといわれている)を交配して育成したもので、昭和45年3月に青リ2号と仮称命名した。

樹 勢 樹令とともに開張性になり、ゴールデンより弱い。隔年結果性が少なく豊産である。

果 実 平均果重300g前後、果形は長円形、果皮色はふつう新聞紙をかけた場合は緑黄色に、赤の太い立縞が入りそのうえに淡紅色となる。果肉は黄白色でち密で歯切れよく、微酸があって、多汁で味は良好である。

リンゴ関係県で試作の結果は第1表の通りである。現在早生品種の祝のあと、レットゴールまでのつなぎの良い品種がなかった。青リ2号の場合、このつなぎ品種として期待される。短所としては、無袋栽培では色つきの良い果実が得られないこと、側果にサビの多いことから、有袋栽培をしなければならない。また、収穫前に落果がみら

れるので、落果防止剤の散布が必要である。貯蔵は約1カ月よりないから、大量の栽培は困難と思われる。各県とも増殖の傾向にある。

2. 着色系の「ふじ」

来 歴 ふじは、農林省東北農業試験場園芸部で国光にデリシャスを交配して育成したもので、昭和33年園芸学会に東北7号として発表、昭和37年「ふじ」と命名、「リンゴ農林1号」として登録された。

樹 勢 樹勢は樹令とともに開張してくる。枝条が下垂する傾向がみられる。葉などは国光に似ている。未だ生産量が少なく、着果過多で隔年結果をさせているような状況である。普通の着果では豊産である。

果 実 平均果重320g前後で、デリシャスより大きい、形状は円から長円形である。果肉は黄白色、肉質は粗雑でかたく酸味は少ない。しかし、ジュースが多く味は良好である。

この品種は採取当時から味がよく、しかも4月頃まで貯蔵がきくことから、秋から春まで需要があり、ゴールデンを圧迫している。ふじは無袋栽培すると味がすぐれているが、色つきが悪いので、着色袋を使用して、色つけに苦労している。

栽培本数が多くなり、色つきの良い系統が各地に発見され、本県では次の4系統に分類し、品質を検討している。

着色系ふじ1系 果実全面に着色するもの、現在長野県の波多腰氏の1系と同じものである。肉質がボンボンし、あまりすぐれない。熟期がおくれる傾向がみられる。

着色系ふじ4系 果実に太い縞の入るもの。本県では現在1種みられている。玉が一寸小さい。

この2つの系統を基にして、更に2系統に分け

第1表 青リ2号各地の試作結果

試験場名	平均1果重	糖度	酸	果実硬度	調査日	備 考
青森園芸試験場	260g	12.4	0.297	12.3	9月11日	収穫前落果多し
岩手園芸試験場	285	12.3	0.59	11.0	9月19日	着色悪し
秋田果樹試験場	336	12.4	0.25	12.8	9月20日	落果多し
秋田果試花輪分場	408	12.2	0.369	11.7	9月18日	落果多し、無袋着色不良
山形園芸試験場	353	12.4	0.28	13.3	9月13日	"
福島園芸試験場	320	13.0	0.26	14.5	9月4日	着色不良
長野園芸試験場	320	14.2	0.254	13.4	8月31日	ビタービットの発生

ている。

着色系ふじ2系 1系のように全面濃紅に着色するが、かすかに太い縞が見えるもの。

着色系ふじ3系 太い縞が強くあらわれるが、果面全体にうすく着色するもの。

この4つの系統に分けて検討を加えている。各地に、このような色つきの良い系統の枝変りがみられるので、省力栽培の点から無袋栽培をすれば、色つきの良い系統を植える必要がある。着色系には、ウィルスを保毒して、色のよくつくものもあるので注意する。ふじは粗皮病にかかりやすいので、マルパ台木かM106を使用する。

3. 東 光

来 歴 青森県りんご試験場がゴールデンに印度を交配育成したもので、昭和38年春、園芸学会に発表したものである。

樹 勢 枝条の形質はゴールデンに類似する。強勢である。新梢葉に印度に現われる黄変葉がみられるが、大きな被害はないようである。成りはじめはゴールデンよりややおおい。

果 実 平均果重254gで、果形は円錐形でまれに不正形を生ずる。果色は黄緑色で、陽光面はわずかに淡紫紅色となる。果肉は白黄色でち密、年を越すと次第にやわらかくなるが、おいしい。採収当時は酸味強く、一種特有な芳香を有し、味

が良好である。

このリンゴの長所は、肉質が非常にソフトで多汁、長期の貯蔵に耐えて味の変らないことである。2月頃に食べると非常においしい。また、独特の芳香は外人好みとされる。果皮をむくときに、手に移り香がするほどである。キレイな花にトゲのあるように、この品種は果形の不正形なことから、芯カビが多くでること、袋かけがおくるとグリンスポットなどの果面障害が多く、収穫前の落果が多いことである。

4. スーパータイプの枝変り

前年伸びた若い枝に、多くの腋芽から発芽して短果枝が着生するもので、一名短果枝型枝変りと呼んでいる。現在わが国では、アメリカより導入されたデリシャス系のものが試作されている。スタークリムソン、レットスパー、ウエルスパー、ミラースーパー、オレゴンスパーなどがある。

長所としては、植付後結実するまでの年数が早く、普通の樹の大きさの8割くらいである。(半矮性)結実性が良好である。色つきが早く、色も良い。剪定は少なくても良い。短所としては枝の分岐角度が狭いこと、果実の糖度が、普通のスターキングなどより、1—2度低いことから、普通デリシャス系の販売後に出荷するようにする。

西は猛暑、北は冷夏

ことしは梅雨が長そうだ—

気象庁は5月21日、6月から向う3カ月間の長期予報を発表した。

これによると“梅雨は長く、北日本は真夏の天候が不順で冷害の恐れがある”と警告している。すなわち、今年の北半球は北極付近が非常に冷たくて、4月半ばに現われるはずの「極」の高気圧が姿を見せたのは5月半ば。しかも夏の主役である太平洋高気圧の北上も遅れており、また台風が1個も発生しないなど、大気の流れが大きく乱れている。

こうした異変は、日本などのような中緯度地帯の梅雨から真夏にかけての天候にも影響を与え、特に北日本では昭和41年以来の“冷たい夏”が訪れる可能性が強いという。

<6月> 上旬早くも梅雨前線が北上し、梅雨入りは全国的に早め。昨年と同じようにドカッと降ってはサッとやむ陽性型の梅雨になりそう。下旬、オホーツク海の高気圧が強まり、北日本は梅雨寒で低温が続き、全国的に大雨の恐れがある。

<7月> 中旬1時的に梅雨の中休みがあるが、そのあと再び前線の活動が活発になり、梅雨明けは平年よりかなり遅れる。北陸、北海道など北日本は天候不順で平均気温が低くなりそう。

<8月> 全国的にかなり暑くなり、特に西日本は平年をぐんと上回る猛暑になりそう。しかし日本海側では晴天が長続きせず、日照不足や大雨で、農作物への被害が心配される。

台風は2個、本土に接近または上陸する見込み。

モモの新品種とその特性

農林省果樹試験場

吉田 雅夫

● はじめに

モモは夏のくだものとしての価値が高く、初夏から晩夏にわたって店頭をにぎわしている。社会生活の変化から商品については、高級化、個性化、多様化が叫ばれているが、モモの品種についても同じような傾向がみられる。

栽培しやすく、品質の良いものが要求されるのはいつの時代も同じであるが、最近の生食用モモについては、個性的なものが要求されるようになり、進物用の白肉桃や風味濃厚なネクタリンが注目されるようになってきた。

一方、モモは用途が広く、加工原料としても重要である。黄肉種だけでなく、白肉種も輸出用として価値があるため、一部では注目されている。

こういう状況を考えたうえで、現在の主要品種と最近話題になっている品種を紹介したい。

● 新品種の特性

1. 生食用モモ

現在栽培されている生食用モモ品種の特性は、第1表に示すとおりである。熟期は6月中・下旬から8月中・下旬にわたってあるが、いずれも白

肉で、酸味は少なく、たべやすいものが多い。しかし早生種については、年により甘味が少なくなるので品質にふれがみられる。

栽培性についてみれば、いずれも東洋系の性質が強く、耐病性もあり、栽培しやすいが、花粉のないものが多く、受粉樹を混植するか人工受粉が必要になる。最近、話題になっている品種としては次のものがある。

(1) 松森早生

山梨県東八代郡八代町米倉の松森美富氏が、自園で発見した品種で、「白鳳」より一週間早く熟し、経済的価値も高いので、昭和43年種苗名称登録された。

樹姿やや直立性で樹勢強い。花芽の着生良好で花粉あり、結実良好である。果実は円形、150~200gくらい、果皮の着色さわめて良好。白肉、肉質軟いが日持性良好である。甘味中~やや多、酸味は微、品質中位である。粘核で核割れ少。熟期は早生と中生の中間、「白鳳」より1週早く、「大和早生」と同時期である。

小果になりやすいので摘果に注意するが、大果にしすぎると肉質が粗くなり、品質も淡白になる。黒星病、灰星病に対する抵抗性は普通だが、細菌性せん孔病には弱いので、風当たりの強くないところに栽植すべきである。無袋栽培可能で「大和早生」より栽培しやすく、商品としても扱いやすい。

(2) 西野白桃

山梨県中巨摩郡白根町西野の芦沢達雄氏が、自

第1表 生食用モモ主要品種の特性

品 種	熟 期 (平塚)	果 実 の 特 性							樹 の 特 性		
		大きさ	果肉色	肉 質	甘味	酸味	核の粘離	日持性	樹姿	花芽着生	花粉の有無
布目早生	6月下旬	中	白	軟、中	やや少	少	半離	やや良	中	多	有
砂子早生	6 下	中、大	白	軟、中	やや少	微	粘	やや良	やや開	やや多	無
倉方早生	6下~7上	中	白	軟やや粗	やや少	少	粘	良	やや直	やや多	無
大和早生	7上~中	大	白	軟、中	やや少	少	粘	不良	中	多	無
松森早生	7上~中	中、小	白	軟、中	中	微	粘	良	中	多	有
白 鳳	7 中	中	白	軟、密	多	微	粘	良	中	多	有
箕島白桃	7 中	中	白	軟、中	中	少	粘	やや良	開	多	有
大久保	7 下	大	白	軟、中	中	少	粘	良	開	多	有
大和白桃	7 下	中、大	白	軟、密	多	少	粘	やや不良	やや開	多	有
清水白桃	8 上	中、大	白	軟、密	多	微	粘	やや不良	やや開	多	有
高陽白桃	8 上	大	白	軟、密	多	少	粘	良	中	やや多	無
中津白桃	8 上	大	白	軟、密	多	中	粘	良	やや開	多	無
西野白桃	8 上	大	白	軟、密	多	微	粘	良	中	多	無
愛知白桃	8 上	大	白	軟、中	多	少	粘	良	やや開	多	有
白 桃	8 中	大	白	軟、密	多	少	粘	良	開	多	無

園で発見した品種で、品質がきわめてすぐれるため、昭和42年種苗名称登録された。

樹はやや開張性で樹勢はやや強い。花芽の着生は良好だが、花粉がないので、受粉樹を混植するか、人工受粉をする必要がある。

果実は円形、250~320gくらい、大果で玉ぞろい良好である。果皮の着色はやや少ないが外観良好である。白肉、肉質は柔軟多汁、甘味きわめて多く、品質優秀である。日持性はやや良好だが、「白桃」ほどではない。

熟期は中生と晩生の中間、「高陽白桃」、「中津白桃」と同時期に熟す。高級品種として集約栽培に向くと思われる。

(3) 清水白桃

岡山県御津郡菟町字清水で発見された「白桃」の実生で、岡山県を中心に進物用品種として栽培されている。

樹勢やや弱い、花粉はあり、結実良好である。果実は白肉、肉質柔軟多汁で甘味きわめて多く、酸味微、品質良好である。日持性がやや不良なので、都市近郊で進物用として栽培するのに適する。無袋栽培では着色やや不良で、夜蛾の被害を受けるところでは、有袋栽培を行う必要がある

2. ネクタリン

古い品種は黒星病に弱く裂果しやすい。また日持性も劣るため、栽培適地も限られていたが、最近の品種は大果で外観も美しく、日持性も良好である。その主なものを第2表に示す。

(1) NJN 17

アメリカ、ニュージャージー州で育成された品

種で、戦後わが国に導入された。

樹勢強く直立性、花芽の着生少なく、結実やや不安定である。果実は短楕円形、200gをこえる大果、果皮の着色良好、裂果なし。

黄肉、甘味多、酸味多、風味濃厚、日持良好、離核、8月中旬に熟す。間引きせん定を中心に行い樹勢を落ち着かせ、結果の安定をはかる。品質よりみて、暖地で栽培すべきである。

(2) 秀峰

長野県上田市大字古里の、曾根悦夫氏の自園で発見された晩生ネクタリンで、昭和45年種苗名称登録された。

樹勢中で、開張性、花芽の着生良好で花粉あり開花期早い。果実円形、240gくらいの果、果皮の着色中位、外観良好、黄肉で肉質しまり、日持良好。甘味多、酸味やや少、半粘核、品質良好。極晩生種で「興津」より20日おそく熟す。台風や虫害の多い地域と寒地は栽培不適と思われる。

3. かん詰用モモ

かん詰専用種の特性は、第3表の通りである。

(1) シルバー・スター

岡山県農業試験場で育成された、白肉のかん詰専用種である。「明星」×(山下×Sims)-55、昭和45年命名発表される。樹勢強く直立性、結実性良好。果実は楕円形、大きさ中。白肉で紅色素少、肉質ゴム質、酸味やや多、香気微有、粘核、かん詰製品の品質良好である。完熟すると乳白色になる。熟期は中生、「大久保」とほぼ同時期に熟す。無袋栽培可能であるが、夜蛾の被害のあるところは有袋にする。

第2表 ネクタリン主要品種の特性

品 種	熟 期 (平塚)	果 実 の 特 性								栽 培 性	
		大きさ	果肉色	肉 質	甘味	酸味	核の粘離	日持性	品質	結実性	耐病性など
早生ネクタリン	7中~下	中	黄	軟、中	中	多	離	不良	中	やや良	黒星病に弱い
興 津	8 上	大	黄	軟、中	中	多	離	不良	良	良	"
N J N 17	8上~中	大	黄	軟、やや密	多	多	離	良	良	やや不良	黒星病に強い
秀 峰	8下~9上	大	黄	軟、やや密	多	中	半粘	良	良	やや良	"

第3表 かん詰用主要品種の特性

品 種	熟 期 (平塚)	果 実 の 特 性						製 品 質	栽 培 性	
		大きさ	果肉色	肉 質	紅色素	酸味	核の粘離		結実性	耐病虫性など
錦	7 中	やや小	橙黄	ゴム質	少	中	粘	中、上	良	無袋栽培可能
岳 桃 2 号	7 下	やや大	黄	"	中	多	"	中、下	やや不良	"
岳 明	7 下	やや大	やや濃黄	"	少	中	"	中	良	"
シルバースター	7 下	中	白	"	少	中	"	中、上	やや良	"
岳 桃 5 号	7下~8上	中	やや濃黄	"	中	やや少	"	上	やや不良	夜蛾の被害あり
岳 桃 12 号	8 中	中	橙黄	"	少	中	"	中、上	良	"
岳 桃 14 号	8 中	大	"	"	少	中	"	中、上	良	"

鹿児島県大島郡沖永良部島 テッポウユリの球根栽培

鹿児島県農業試験場

小林 正 芳

1. 沖永良部島の概況

沖永良部島は鹿児島県の南方536 kmにある島で、周囲は49.3 km、面積は94.5 km²で和泊町、知名町の2カ町がある。海岸線は屈曲が少なく、周囲は珊瑚礁でとりかこまれ、年平均気温21.6°C、年平均降水量は2,077 mmで湿度も79%と高く、高温多湿の亜熱帯気候である。

この島で輸出、国内向けのテッポウユリの球根の生産が行われているが、栽培の歴史も古く、今年で70年も経過して、年とともに増産の傾向がみられ、昭和47年産球根の販売額は5億4千万円に達している。

栽培地の地層は古生層であり、その大部分は琉球石灰岩(珊瑚石灰岩)で覆われている。古生層は大山の頂上に新村粘板岩層が、手々知名の北方と国頭附近に大畑砂岩層が、いずれも小範囲に露出している。琉球石灰岩は古生層を覆い、島の大部分を占め、国頭礫層は琉球石灰岩の上部を覆い、島の山頂附近まで分布している。国頭東北海岸その他には石灰質(有孔虫遺骸その他よりなる)の砂からできた砂丘がある。

火成岩は和泊町内城を中心に、小範囲に花崗岩が露出している。

土壌は琉球石灰岩、国頭礫層、古生層、花崗岩を主要母材とした土壌からできており、土性は花崗岩土壌を除いていずれも重粘な土壌で、石灰岩土壌は腐植に富んでおり、他の土壌は少ない。土壌の反応は石灰岩土壌は中性から微アルカリ性で、他は強酸性が多く、国頭礫層に由来する土壌の反応は、いずれも強酸性で下層土が強い。

しかし表層土は石灰分に富むものがみられるが、これは前記海砂(海岸に分布する石灰質の砂丘砂)をユリの生産者が投入する習慣があるための影響と思われる。古生層の場合も同じである。

この習慣は基盤整備等で下層土が上に出たとこ

ろでは、土性が強酸性となりユリの生育にも悪いが、海砂の客土は土壌反応の矯正だけでなく、同時に重粘な土壌の理学的性質の改善に役立ち、塩基の流亡の多い地方では、その効果に持続性があるので都合がよい。最近では、この習慣もなくなってきている。

以上のような土壌でユリが栽培されているが、重粘な土壌ではユリの球根のしまりがよく、温暖な気温と多い雨量で、良質の球根が生産されている。

昨年は4,600万球、5億4,000万円の生産になっているが、植付が9月下旬～10月下旬、収穫が6月で台風常襲地帯であるこの島で、台風期をさけた防災作物として、今後も安定した生産が続けられるであろうが、これまで生産が伸びるには、多くの苦難を乗り越えて今日まできている。

2. ユリの栽培

栽培されている品種は主にジョージア、ひのもとであるが、優秀な品種の量産と品質の良い球根生産が、今後の課題であり、また沖縄県復帰にもなう産地のあり方も、検討しなければならなくなってきている。

現在、沖縄県では沖縄本島、久米島、伊計島、瀬底島、宮古島、石垣島などで生産が始まり、48年産は150万球の出荷が見込まれている。品種も今後は地域に適應した品種の導入が必要とされる

栽培方法の概要

- (1) 種 球 前年の9月にりんべん繁殖によって生産された種球を使用する。
- (2) 植付時期 9月下旬～10月下旬
- (3) 施肥方法 全量元肥方式(植付時期)、全量追肥方式(12月下旬)
- (4) 施肥量 15:15:15(10a当り成分量)
- (5) 10a当り植付球数 ジョージア…13,000球
ひのもと…18,000球、床巾1.2m、通路0.6mであるが、機械利用の場合は、床巾1.0m通路0.5mとし、トラクターで床作りする。
- (6) 除草剤 シマジン、10a当り150g、
植付直後、12月下旬、3月
- (7) 取 穫 5月下旬後半から7月上旬前半まで。
- (8) その 他 葉散、摘蕾、病株等抜取りの作



業を徹底する。

3. 省力栽培の普及と問題点

このような栽培で総面積（鱗片繁殖面積を含む）700haで抽苔株数1億5,000万本はあるかと思われるが、球根生産が目的であるので摘花、摘蕾されるので花はほとんど見られない。

面積の増加、労力の不足、基幹作物サトウキビとの関係から省力化が進み、各作業が省力されてきた。

植付時の省力

- (1) 種球の消毒（従来通り）
- (2) 施肥の省力 慣行性肥料による全量元肥、全層施肥により追肥作業の省力。
- (3) 植 付 広い面積ではトラクターによ

る作条、覆土が可能になった。

- (4) ダイジストン根の施用 アブラムシ、球根ダニの防除のため1球18球直下施用、このため栽培期間中、アブラムシの防除薬散布が省力化された。
- (5) 除草剤の利用 除草作業の省力。

摘蕾作業の省力

摘蕾剤の利用「摘蕾剤ブルー」の散布により摘蕾作業の省力。

収穫作業の省力

トラクターに掘取り機をセットし掘取り作業を省力。

以上が主な省力作業であるが、こゝで問題となってきたことは、あまりにも省力化が進むと、農家が畑に入る回数が減り、病害等の早期発見、特に球根で一番恐ろしいウイルス病の抜き取り、優良母球の選定等大切な日常の注意がおろそかになり、省力化作業体系の普及にとまなう大きな弊害として、球根生産では畑の見まわり回数の減少が、大きく品質に影響してくることは事実である。

いくら省力されたからといっても畑の見廻り、作物の観察は必要であり、省力化対策が惰農育成対策とならないよう指導することが、今後の大課題ではなからうか。

アジア米（コメ）貿易基金が発送

国連アジア極東経済委員会（エカフェ）東京総会は、去る4月19日午後本会議を開き、「アジア経済同盟」と「アジア米（コメ）貿易基金」の両協定案に関係諸国が署名した。

アジア経済同盟は5カ国、アジア米（コメ）貿易基金は3カ国の署名があれば発動する。両協定は今後エカフェ域内の貿易拡大に大きな役割を果すことになると思われる。

アジア米（コメ）貿易基金は、米の需給を円滑にするため1969年以来、専門家、関係各国政府間協議会を開いて検討した解決策の一つである。

エカフェ域内の開発途上国は、国際金融機関や先進諸国から無償の援助や長期低利融資による総額5千万ドルをきょ出してもらい、関係各国の政府へ

スで米の延払い取引（期間5年以内、金利年7.5%）を促進しようというもので、年間取扱い量は20万吨と想定しており、基金の規模は利子余裕金の投資などによって、10年後には8,500万ドルに増える見込である。

米国からの農林水産物輸入額

昨年は53.8%と急増

農林省は去る4月28日、47年度の米国からの農林水産物輸入の額は27億3,996万7千ドルに達し、前年度を53.8%も上回ったと発表した。

なお工業製品をも含めた米国からの総輸入額の伸び26.3%を大きく上回っており、これに伴い米国からの総輸入額に占める農林水産物の割合も、46年の35.7%から47年度は43.5%に増大した。

みかんの防除作業方式別栽培面積 (昭和45年) (ha)

区分 県	スピードスプレーヤー												広巾散布機				定置配管施設				全栽培面積		
	自走式			けんいん式			計			導入台数			カ所数			面積							
	導入台数		面積	導入台数		面積	導入台数		面積	導入台数		面積	カ所数		面積								
	個人	共同		計	個人		共同	計		個人	共同		計	個人			共同	計					
茨城					2	2	19			2	2	19										194	
千葉													50	10	60	20	190	90	280	359		674	
神奈川					17	17	32			17	17	32		7	7	250	4,787	21	4,808	2,052		3,930	
静岡					1	1	11			1	1	11	1	1	11	15,121	232	15,353	11,024		17,700		
福井					1	1	3			1	1	3				7	2	9	7			143	
岐阜																30	1	31	45			220	
愛知					1	8	9	107		1	8	9	107	4	4	61	303	32	335	1,025		3,420	
三重					4	4	106			4	4	106	9	9	716	1,455	50	1,505	1,635			2,760	
京都																7	22	29	137			247	
大阪					1	1	15			1	1	15				1,089	38	1,127	1,303			2,950	
奈良																160	3	163	66			468	
兵庫	1	1	8		2	2	14			3	3	22		9	9	93	401	41	442	769		846	
和歌山	2	2	40		1	1	12			3	3	52		1	1	15	12,603	100	12,703	6,783		12,100	
岡山														3	3	36	54	22	76	151		810	
広島					1	1	2			1	1	2	1	5	6	50	7,667	94	7,761	5,033		8,510	
山口	3	3	47		5	5	35			8	8	82	3	6	9	62	2,955	124	3,079	1,980		4,080	
徳島					1	1	26			1	1	26				3,717	51	3,768	2,951			4,020	
香川	1	1	50							1	1	50	2	15	17	190	3,272	96	3,368	2,632		5,160	
愛媛	4	5	9	408		5	5	378		4	10	14	786	7	14	21	241	41,727	825	42,552	18,725	21,500	
高知	4	4	70							4	4	70	320	3	323	110	7,400	200	7,600	2,700		2,850	
福岡	2	2	38							2	2	38		4	4	56	9,505	402	9,907	7,192		8,570	
佐賀														4	4	100	14,500	250	14,750	10,600		13,100	
長崎	1	1	15		6	6	83			7	7	98				4,974	465	5,439	7,960			13,900	
熊本					5	5	65			5	5	65		4	4	117	9,478	248	9,726	8,264		12,700	
大分		5	5	81	1	11	12	196		1	16	17	277	1	10	11	114	8,621	405	9,026	7,548	9,430	
宮崎		11	11	179	2	6	8	142		2	17	19	321	1	37	38	459	3,715	92	3,807	3,601	6,270	
鹿児島		6	6	208	1	7	8	238		1	13	14	446		8	8	93	4,159	215	4,374	3,856	6,230	
計	4	41	45	1,143	7	82	89	1,484		16	123	134	2,627	386	153	539	2,195	157,897	4,121	162,018	108,400	163,000	
構成比				0.7				0.9					1.6									66.5	100

(注) 1. 動噴によるものは50,138ha (全面積163千haの30.5%)と見込まれる。

※ 4月号「かんぎつの多目的スプリンクラー事業」12頁参照

今年の農業観測

生産は微増するが
所得は落ち込む？

農林省は去る5月4日、48年度の「農業観測」を発表したが、これによると、農業生産の伸びは、4年ぶりに上向いた47年度より落ち、微増にとどまるが、一方、農業資材の価格急上昇などによって、農産物価格がやや値上りする見込みなので農業総産出額は前年度をある程度上回る見通しである。

しかし、農業生産の伸びが鈍ったり、経費が増大しているため、生産農業所得は前年度の伸びを大きく下回るものとみられる。

しかし、自給率の低下などで、日本の農業経済は世界の農産物需給の変化に、大きく左右される体質となっているので、海外の農業生産の動きによっては、こんどの「観測」もかなり修正されることになるかと農林省ではみている。

農業生産 農業生産は、米価の抑制や、米の生産調整などで、44年度から46年度までそれぞれ前年度を下回り続け、兼業や出かせぎ増大の大きな原因となってきたが、47年度は米価引上げや、米、みかんの豊作などで5.9%も伸びた。

しかし、48年度は、豚肉や大豆の生産増は見込まれるが、麦類やイモ類が引続きかなり減少するほか、みかんが裏作に当るので、全体としては僅か1~2%の伸びで終りそうである。

農産物価格 一方、農産物価格は、牛乳や鶏肉、大豆がかなり値上りし、みかんも大豊作で暴落した前年度の水準を、だいぶ持直す見通しなので、4%弱の上昇が予想されている。しかし4.9%も値上りした47年度にくらべれば、やや落ち着いた感じである。

農業総産出額 農業総産出額は、45年度に僅か1%の伸びで頭打ちとなり、46年度は15年ぶりに前年度を下回った。しかも5.2%もの大巾減少で農村不況の深刻化が問題になったが、昨年度はいっきょに9.9%前年度を上回り、農家経済にひと

息つかせた。

48年度の農産物の生産・価格の見通し

		(対47年度比)	
		生産量	価格
農業生産		1-2%	↗
農産物価格		4%弱	↗
農業総産出額		5%くらい	↗
農業資材価格		7%程度	↗
生産農業所得		3%強	↗
品目	生産量	価格	
米	6-15%台	↘	
小麦	2%台以内	↘	
牛乳	2%台以内	↗	6-10%台 ↗
豚肉	6-15%台	↗	安定的に推移
鶏肉	6-15%台	↗	3-5%台 ↘
カン	6-15%台	↘	3-5%台 ↘
リンゴ	2%台以内	↘	11-15%台 ↗
ブドウ	2%台以内	↘	3-5%台 ↗
野菜	3-5%台	↗	6-15%台 ↗
パレイシ	6-10%台	↗	3-5%台 ↗
大豆	6-15%台	↗	3-5%台 ↗
茶	2%台以内	↗	6-10%台 ↗
			3-5%台 ↗

〈注〉↗は増加または値上り、↘は減少または値下り、→は横ばい

48年度も、農業生産の微増と若干の価格上昇によって5%くらいの伸びが期待されているが、前年度の伸び等には遠く及ばない。

生産農業所得 また農業総産出額から経費を引き、米生産調整奨励補助金などを加えた生産農業所得も、47年度は前年度を12.7%も上回ったが48年度は3%強と、伸び率はかなり落ち込む見込みである。

こんどの「観測」で目を引くのは、農業資材価格が昨年度を7%程度も上回るとみられていること、農業資材はこのところせいぜい3%台の上昇率で取ってきたが、今度は農業機械や、肥料、農業などの値上りに加えて、配合飼料の価格がさらに高騰する気配が強くなり、農家の経営を大きく圧迫しそうである。

あとがき 内外の情勢は最近相当の振幅で揺れ動いているようです。これまでのような安易な(と云っては誤弊があるかも知れませんが)考えで問題に対処することは到底不可能な時代に突入しそうです。

とくに、国際的な異常気象がもたらす農産物の不作は、容易ならぬ問題に発展する可能性があります。わが国の米は、当分需給面に問題はないという楽観論というか、オーソドックスな見方というのかとにかく一部には「まだ心配ない」とする意見がありますが、果してそうでしょうか？

関東以西は別としても、今夏の東北は寒冷な気象に見舞われると予報されているにつけ、何となく肌寒さを覚えてならないこの頃です。(K生)